

自然誌 だり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 128号

2021年 6月



紀伊山地のニホンオオカミ (清水千佳子・画)

ニホンオオカミは短足？－表紙イラストの長い解説

清水善吉

狼ネタを本誌前号で河北均さんが書いていましたので、獣屋（獣肉店を営んでいるわけではなく、哺乳類を調べているという意味ですので、ご来店なさらぬよう）の端くれとして生きてきた私も黙しているわけにはいきません。

まず、日本列島（ここでは本州、九州、四国）に存在したオオカミという動物はどんな姿だったのでしょうか。オオカミというと、グループで狩りをするちょっとスマートな動物というイメージをもつ方が多いのではないのでしょうか。実際、テレビ等で放映される大陸のオオカミの姿はたしかに「カッコイイ」という形容詞が似合います。

では、日本のオオカミもあのようなスタイルをしていたのでしょうか。ヒト *Homo sapiens*にもいろいろなスタイルの方がいるように、オオカミも棲む場所が違ったら姿も異なると考えられます。ただ、残念ながら、日本ではオオカミを観察することはできません。知られているように、本州のオオカミは奈良県東吉野村で1905（明治38）年の捕獲を最後に絶滅したということで、以後、日本の山野において彼らを観察したことがある人はいません。彼らのスタイルを知ろうと思えば、過去の記録や標本にたよるしかありません。

そこでまず、手元にある古い図鑑などからオオカミのスタイル、とくに四肢の長さがどのように記載されているのかを調べてみました。以下に発行年の古い順に、和名・学名および形態的特徴等について各図鑑の記述を紹介します。

①ヤマイヌ *Canis lupus hodophylax* Temminck, 1844

東京教育博物館（現国立科学博物館）蔵の福島県産オス剥製の計測値が掲載されている。また、ファウナ ジャポニカのオオカミの項（テミンク1844）を訳出引用して、体が小さく、脛がそれに比しても短い、とある。また、ヤマイヌはもと本州、四国、九州に生息とあるので（ルビ著者）、上述の最後のオオカミ捕獲後20年ほどで絶滅と判断される状況であったことがわかる。（哺乳動物図解。岸田久吉1925，農務省編，日本鳥学会）

②ヤマイヌ *Canis lupus hodophylax* Temminck & Schlegel, (1844)

エゾオオカミに比して脚短かきをもって直ちに分たる、とある。（原色日本哺乳類図説。黒田長禮1940，三省堂）

③ホンドオオカミ *Canis lupus hodophylax* Temminck, 1839

オオカミの中で最小の亜種のひとつで、特に四肢と耳介が短い。しかし尚、四肢の長さは長脚のイヌと大差なく、日本在来のイヌよりは遙かに長い、とある。（分類と生態・日本哺乳動物図説。今泉古典1949，洋々書房）

④ニホンオオカミ *Canis lupus hodophylax* Temminck

今泉（1949）と同じ。（原色日本哺乳類図鑑。今泉古典1960，保育社）

⑤オオカミ *Canis lupus* (Linnaeus, 1758)

ニホンオオカミの頭胴長95～114cm，尾長30cmとあり，イヌの頭骨とは吻部の凹度が小さいこと，裂肉歯が大きいことなどで区別できる，とある。（日本の哺乳類。阿部永監修1994，東海大学出版会）

⑥オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758

ニホンオオカミの頭胴長950～1150mm，尾長300mm，小型，とある。（The Wild Mammals of Japan. Ohdachi *et al* 2009, SHOUKADOH Book Sellers）

また、図鑑ではありませんが、以下の狼研究書3冊も調べました。

⑦日本の犬と狼。齋藤弘吉1964，雪華社。

体格が小さく、朝鮮の狼と印度狼の中間くらいの大きさで橈骨（とうこつ、手首から肘までの骨、

著者註)が短い、とある。

⑧狼—その生態と歴史—。平岩米吉1981, 動物文学会。

上述のテミンクや齋藤の考説を紹介し、あわせて阿部余四男による骨格研究から得られた「最小の部類に属する狼で、肢が短く」という考説を掲載している。

⑨日本産狼の研究。直良信夫1965, 校倉書房。

頭骨および歯牙の大きさの点では小型であることが特徴、とある。

このように文献記録からは、大陸のオオカミに比べて小さく、短肢であるニホンオオカミの姿が浮かび上がります。小型であることはフォスターの法則（島嶼化）で説明できますが、短肢なのはなぜでしょう。日本人が短足なのは昼生活の影響とも聞いたことがあります。オオカミは正座しないので山岳地形への適応でしょうか。

次に、ニホンオオカミの剥製標本についてみてみましょう。日本には3体の本剥製が残され、和歌山県立自然博物館（和歌山大学寄託）、国立科学博物館、東京大学にそれぞれ収蔵されています。その内の1体が図1です。皆さんのイメージされるオオカミ像と比べていかがでしょう。他の2剥製（ネットで簡単に出てきますのでご覧下さい）も似たり寄ったりというより、さらに貧弱な印象を受けます。また、いずれの剥製も短肢で腰がおちています。剥製の作り方を問題視する向きもありますが、もともと短いのですから仕方ありません。



図1. ニホンオオカミの剥製（和歌山県立自然博物館保管）



図2. 吻部の比較。オオカミでは凹度(↓)が小さく、イヌでは大きいとされる（阿部1994）。

上から、ニホンオオカミ（レプリカ）、シベリアンハスキー犬（以上、三重県総合博物館蔵）、縄文犬（丹羽百合子1982；動物と自然、12（1）を改変）。

さて、表紙イラストについてです。本作品は、清水千佳子さん（妻です）が和歌山標本をもとに描いたものです。イラストですから、いかよう（大陸のオオカミのように足長・腰高）にすることも可能です。しかし、あえてニホンオオカミの特徴を表現したのですが、不恰好と評判は今ひとつのようです。オオカミを離れても、足長・腰高をカッコイイとする心根には賛同しかねる私です。

最後に、ニホンオオカミの分類について少しだけ触れておきます。

独立種ニホンオオカミ *Canis hodophylax* とする考説も一部ありますが（今泉1970；哺乳動物学雑誌、5）、上述①～⑥の図鑑ではいずれも種オオカミ *C. lupus*とされており、ニホンオオカミ *C. lupus hodophylax* は亜種、つまり地方型の位置づけが主流です。では、イヌはどうでしょうか。イヌについては⑤の図鑑のみ記述があり、ノイヌ *C. familiaris* として独立種扱いで、頭骨で区別できるとあります。図2にその実例を示します。たしかに、オオカミとハスキー犬はなんとか区別できますが、縄文犬となると格段に怪しくなります。イヌの頭骨も元々は吻部の凹度が小さかったのが、「可愛いペット化」の過程で、吻部の長い獣顔が嫌われ、吻部を押し込んだ平板顔の犬へと変化（当然、額段ができる）していったものと思われます。

標本閲覧でご支援を受けた和歌山県立自然博物館と三重県総合博物館に感謝する。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

ワッフルのような形状になったカキ ～寫形現象～

中 野 環

岩や小石、貝殻などに固着して生活する軟体動物のカキのなかまは、固着する基質の形や範囲などの物理的環境に合わせて成長するため貝殻の形が不定形になり、種の同定に迷います。固着する左殻の表面には、基質の凹凸を写し取るように凹凸ができます。平らな個体では、左殻だけではなく、軟体部に上側にある右殻の表面にも基質の形状を模したように、顆粒や肋のような形状が形成されます。このような現象は、寫形現象と呼ばれます(稲葉2003, 川瀬・西本2005)。また、放射肋や顆粒などの凹凸が写し取られてできた二次的な形状は、偽放射肋(瀧1931), 偽顆粒(佐藤1983), 偽彫刻(野田1999)などと呼ばれます。

2021年3月20日に三重県紀北町長島で採集したワニガキ *Dendrostrea folium* (Linnaeus, 1758) にユニークな形状の寫形現象を確認したので報告します。

ワニガキは、左殻の一部分がイボ足のように伸び、刺胞動物のヤギ類の幹などの棒状の基質を抱きかかえるように付着するので細長い個体が多くみられます。今回確認した個体は、太さ1.5mm, 目合い5mmの網に付着したもので(写真1), 類円形に成長しているため、カキツバタ *Hyotissa imbricata*



写真1. 網に付着するワニガキ

(Lamarck, 1819) に似ています。靱帯の両側に虫状コマータはなく、左殻にイボ足状の形状が認められることから、疑問は残りますがワニガキに同定しました。右殻表面は、基質となった網を模したように網目状の凹凸が形成され、まるで焼き菓子のワッフルのようです(写真2, 3)。一緒に付着していたヒオウギ *Mimachlamys nobilis* (Reeve, 1852) の殻長が約60mmであったことから、網が海中に置かれていた期間は1年未満であると考えられます。



写真2. 標本(中野環コレクション: TNC-Mo. 20494)



写真3. 焼き菓子ワッフル

引用文献

- 稲葉明彦2003. 世界のカキ (1) 総論. 西宮市貝類館研究報告, 2, 59p + 20p.
川瀬基弘・西本博行2005. 貝類の寫形現象. 名古屋地学, 67, 1-18.
野田圭典1999. イシダタミ(軟体動物, 腹足綱)の彫刻をもったマガキ(軟体動物, 二枚貝綱). 南紀生物, 41 (2), 107-108.
佐藤勝義1963. 偽顆粒を生じたカキ. ちりぼたん, 14 (3), 51.
瀧 巖1931. 貝類雑録 (3). Venus, 3 (1), 44-45.

(なかの たまき: 度会町大野木1711-1)

論文報文の表題・著者名に関する問題意識

河 北 均

論文報文を書くとき、過去の文献について調べます。例えば、A種が採集され、三重県で記録がないようだとします。記録の有無については過去の文献を調べなければなりません。「三重県初記録のA種」という表題をつけドヤ顔で発表しても、万が一、記録があった場合には恥をかきます。表題をせめて「津市でA種を採集」とか「三重県で再発見されたA種」にしておけば良かったと後悔することになります。そのようなことにならないように過去の文献を調べなければなりません。関連した内容の文献を渉猟する際、文献の表題をみます。内容が明確に分かるような表題は良いのですが、なかには困惑するような表題もあります。三重県関連ではありませんが、いくつか実例をあげます。

「ウラゴマダラシジミの採集報告」、どこで採集したのだ? 「カマキリの失敗」、なにを失敗したのだ? 獲物を捕らえ損ねたのか? 羽化失敗なのか? 参考になりそうな文献をさがすときに、このような表題を見つけてしまうと手に入れて拝読するべきか無視するべきか迷ってしまいます。

発表された時点では違和感がなかったのですが、現在からみれば誤解されるような表題もあります。「三重県のトゲナナフシ」という報文の表題を見たとき、三重県のトゲナナフシの総説かと思いましたが、読んでみるとトゲナナフシが鳥羽市で1♀が採集されたという短報でした。この報文が発表されたのは1957年、今から半世紀以上前のことです。当時、トゲナナフシの記録は全国的にもあまりなかったので前記の表題になったようです。さすがに時代的背景までは考えが及ばないので、表題も後世の人が分かるように配慮してほしいものだと思います。

表題からは見落としてしまう実例もあります。中西元男さんが既に指摘されているので(中西2016)、重複しますが、簡単にふれます。「平塚ダム湿地帯(三重県)におけるハッチョウトンボについて(第2報)」という報文で、ハッチョウトンボが主題ですが、ヒメヒカゲについても述べられているのです。表題から察すると誰が見てもトンボの文献です。1956年の報文でこの当時はハッチョウトンボの方が珍しいと思われており、ヒメヒカゲはついでの記録だったのでしょう。今となっては、ヒメヒカゲは三重県レッドリストで絶滅(EX)、ハッチョウトンボはリスト外、どちらが重要かは一目瞭然です。この文献を見出した中西元男さんの慧眼には恐れ入りますが、普通はヒメヒカゲに関する文献としてはスルーされて当たり前でしょう。

次に著者名の問題です。著者名は個人名が普通ですが、〇〇を調べる会、〇〇地区調査会など団体名義の場合、多少なりとも問題が生じます。責任者が誰か分からない場合があるのです。内容が不確かなので、責任の所在を曖昧にしたと疑われてもしかたがありません。質疑のしようがありません。しかも発表後、役割を終えて解散している団体が多く、内容について問い合わせしようにもできないのです。私自身も団体名義で発表したことがあります。団体総括責任者の方が団体内訳として個人名を小さく記して、文責の一員として明記しました。でも、人数が多くても連名の方が団体名義より安心感がありますね。著者名を見たとき、信頼できる人物かどうかある程度判断できますが、団体名義の場合は顔がみえません。

論文報文の表題・著者名について、文献を渉猟する立場から問題点を述べましたが、書く立場でもあるので、本文が分かりやすい表題をつけるように心がけていきたいものです。

文 献

中西元男2016. 三重県の蝶に関する古い文献・XXIV. ひゃくとりむし, (393), 6-9.

則竹輝夫1956. 平塚ダム湿地帯(三重県)におけるハッチョウトンボについて(第2報). 新昆虫, 9(10), 51.

(かわきた ひとし: 伊勢市岡本1丁目17-18)

三重県におけるキイハナネコノメの新たな産地

山本 和彦・三谷 有幸

キイハナネコノメ (*Chrysosplenium album* var. *nachiense* H. Hara) はユキノシタ科ネコノメソウ属の多年生草本で、紀伊半島に生育する日本固有の植物です(加藤・海老原 2011)。本種は、三重および和歌山県版のレッドデータブックにおいて絶滅危惧種として掲載されており、シロバナネコノメソウ (*Chrysosplenium album* Maxim) の変種として扱われています。両者は、花卉のように見えるがく片の部分が白色であるなどよく似ていますが、シロバナネコノメソウのがく片の先はとがっているのに対しキイハナネコノメのそれは丸い、またシロバナネコノメソウの雄しべ、雌しべはがく片より長い、キイハナネコノメのそれらは短く、ほとんどがく片を越えることはないといった特徴があります(織田ら 2020)。



写真1 熊野市飛鳥町大又で確認されたキイハナネコノメの花(2021年3月26日)。

近年、織田氏らの調査によりキイハナネコノメは、三重県最南端部から和歌山県田辺市北西部の限られた地域に分布することが明らかにされ、三重県では2013年に紀宝町桐原付近で1地点の生育地が確認されていました(図1、三重県農林水産部みどり共生推進課 2015、織田ら 2020)。

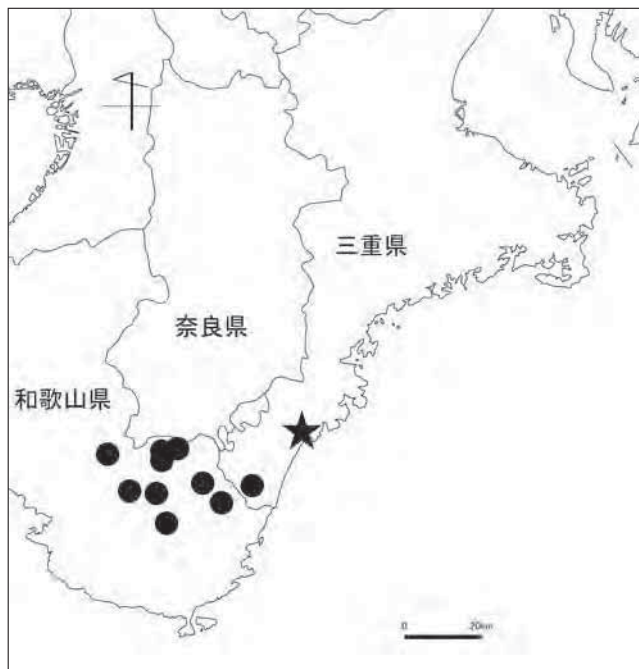


図1. キイハナネコノメの生育地。
●：織田ら(2020)により確認された生育地(抜粋)、
★：今回新たに確認された生育地。

今年(2021年)の3月下旬、筆者らは桐原より直線距離で約30km北東の地点で本種の新たな自生地を確認したので報告します。

本種を発見したのは熊野市飛鳥町大又山林内の小さな谷筋で、水位が上がると水没するような流れに近い立地に点々と開花個体を確認することができました(写真1、図1)。近くにはキシウネコノメもみられ、また、周囲の水辺林の林床にはシロバナフデリンドウやベニシスラン等も生育していました。今回の発見によりキイハナネコノメの分布域が少し拡大しましたが、さらに尾鷲側の溪流でも新たな産地が発見されるかもしれません。来年早春の沢歩きが楽しみです。

キイハナネコノメを同定していただいた人間環境大学の藤井伸二氏、紀伊半島のネコノメソウ類についてご教示いただいた市川正人氏にお礼申し上げます。

文 献

- 加藤雅啓・海老原淳2011. 日本の固有植物. 東海大学出版会, 神奈川, 503p.
三重県農林水産部みどり共生推進課(編)2015. 三重県レッドデータブック2015—三重県の絶滅のおそれのある野生生物—.
三重県農林水産部みどり共生推進課, 津, 757p.
織田二郎ほか 2020. 紀伊半島のシロバナネコノメソウ(ユキノシタ科)の分類学的研究. 植物研究雑誌, 95(4), 193-210.
(やまもと かずひこ: 尾鷲市小川西町8-40, みたに ありゆき: 岐阜県笠松町田代1028-5)

コハクオナジマイマイの分布拡大に関する新情報

中 優

自然誌だより125号で筆者はコハクオナジマイマイの分布拡大に関する仮説を提示した。この仮説に対しては、中野環さんから仮説と同様の新たな整地工事等が行われていた場所で本種が見つかった例が同126号で示された。

ところが今回、全く想像していなかった情報が、大杉谷自然学校の大西かおりさんから寄せられた。それは三重県が「災害に強い森林づくり」と「県民全体で森林を支える社会づくり」を進めるため、平成26年から新たに導入した「みえ森と緑の県民税」を原資とする事業の一環で発行された令和3年度のカレンダーにコハクオナジマイマイが載っているという情報であった(図1)。確かめてみると、6月・7月のカレンダーの左上に写っているのは紛れもなくコハクオナジマイマイであった。

この写真撮影時のデータを得るため、三重県農林水産部みどり共生推進課に撮影者への問い合わせをお願いしたところ、快く引き受けていただき、次のような回答を頂いた。



図1. 県民税でつくったカレンダー

撮影日：令和2年7月19日

撮影場所：スーパーで買った葉物野菜（野菜の種類や産地は覚えていない）に付いていたもので、庭のアジサイの葉に逃がして撮影

上記回答で分かったことは次の2点。

- ①コハクオナジマイマイが野菜を栽培している畑に生息していること
- ②コハクオナジマイマイが流通を通じて分布を拡大している可能性があること

1点目は想定されることであったが、2点目は想像したことがなく驚きであった。

今回の写真からははっきりしないが、写っている個体は成体になる手前の亜成貝のように見え、この個体が卵を産んで数を増やしていった可能性は低かったと思える。しかし、成貝で交尾後の個体であったなら、今頃は撮影者の庭で子孫が元気に這い回っているかもしれない。

末尾ながら、貴重な情報を頂いた大西かおりさんに感謝する。また、写真撮影者に確認の労をとっていただいた三重県に感謝する。

文献

中 優2020. コハクオナジマイマイの分布拡大に関する仮説。自然誌だより, (125), 3.

中野 環2020. コハクオナジマイマイが分布を拡大する要因は? 自然誌だより, (126), 6.

(なか まさる：伊勢市小俣町本町1284)

事務局から

○三県合同フィールドワーク

昨年度実施できなかった行事ですが、今年の開催も未定です。秋以降に社会情勢をみながら判断する予定です。

○退会連絡の御願い

本会は会費未納3年で退会扱いとしておりますが、この辞められ方は不信が募りがちです。退会をご希望の方はメール一通、葉書一枚でけっこうですので、辞めますとお知らせ下さい。

オクタマシダ保護の行動報告

私が住んでいる大台町は山の町で、いつも町内のどこかの県道、町道、林道で舗装工事や拡張工事、法面舗装工事が行われている。それらの工事で削られていく山肌や大規模にコンクリートで覆われ固められていく崖・法面を見る度に毎回落胆し、悲しい思いをしている。自分は何もできないのか！できることはないのか！と。そんな時に、町内を通る国道422号線の法面の杉林が200～300mに渡り伐採されていた(写真1)。そのほんの先にはオクタマシダが数株自生する崖(法面)があるのだ。県の絶滅危惧種ⅠB類に分類されているチャセンシダ科のシダである。これはなんとかせねばと思い、当会の清水事務局長に相談した。そして、その助言に従い先ず大台町にこの伐採工事の依頼主を尋ね、その後清水さんにご紹介いただいた三重県みどり共生推進課の和田さんに工事の詳細とオクタマシダの保護に関して助言を求めた。

和田さんからはすぐにお返事をいただき、この伐採工事は大台町と中部電力の共同事業で、災害時に倒木により電線が断線してしまうことを防止するために予め危険木の撤去を実施している、とのことであり、法面については伐採後に舗装する等の対応はなくそのままになる、とのことであった。良かった！さらに、オクタマシダに関して、県が把握している場所で間違いないかと確認された。そして、今後林道及び治山工事において自生地を保全を求めていく場合は、そのおおよその位置を担当部局に事前に伝達し、配慮を求めておく必要がある、との仰せであった。

今回の一件で、ある程度は希少植物を守る行動が取れるとわかった。とても良かったと清水さんには感謝申し上げる。加えて今春、無事に生育しているオクタマシダの自生のようすを確認したことも報告する(写真2)。(宮島美栄)



写真1. 工事現場（大台町滝谷，2020年12月27日）



写真2. オクタマシダ（2021年3月14日）

編集後記

とても早い梅雨入り宣言がだされ、カタツムリをよく目にするようになりました。カタツムリに表情はありませんが、私は不思議と親しみを感じます。中さんの記事にある県民税カレンダーを使っているご家庭では、今頃コハクオナジマイマイを見ているのしょうね。なかには、このカタツムリの由来に思いをはせている方もおみえかもしれません（いないか）。夏号は9月発行予定ですので、多くの投稿お待ちしております（善）。

自然誌だより128号 Mie Natural History Research Group News, No.128

発行日 2021年6月19日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp